

2006（平成18）年度 前期 京都大学 入試問題 文理共通 第2問 解答例

*解答行数は、問一～問五で順に、四行、四行、三行、四行、八行である。問五に関して京大がいかにか精緻な解答を要求しているかが理解できる。ただ近年ではそのような行数は出題されないのので、問五のみなんとか解答行数五行に減らした解答例も併記した。

問一（四行）

古本屋の前に詰めかけた中学生の群れを見て、「私」は教科書に古本があり、それを扱う古本屋の存在を知って、母親の負担を軽くするために少しでも安い古本を買おうと思い立ち、実際にそうする勇気を得たということ。

*そもそも古本教科書の販売を知らなかったのであるから、「刺激」の説明として、まずは「さういふ古本屋の存在を知り」の指摘が必須である。

問二（四行）

「私」は自分の教科書だけ古本なのが屈辱で、古本を買ったことを後悔し、自分の貧乏人根性が忌々しく、虚栄心から兄の使い古しだという狡猾な嘘を考えたが、墨で消した前の持主の名前によってその嘘が露見する不安があったから。

*設問要求は「犯罪の痕跡」のように思えた理由である。「虚栄心から嘘をついた」「ばれることを恐れている」などでは、「**犯罪の痕跡**」と思われる理由が説明されていない。最も基本的な解答要素の一つである指示対象「その（黒い跡はまるで犯罪の痕跡のやうに）」を解答化する習慣さえあれば、そういう初歩的なミスは回避できる。すなわち、「前の持主の名前→墨で塗り消す（犯罪＝ウソの証拠隠し）→痕跡の意味に気づかれれば、ウソがばれる」という説明をすべきなのである。

問三（三行）

わずかな金を惜しむためではなく、母親の負担を軽くするための、いじらしい心根による親孝行という善行の喜び。

*「吝嗇（の喜びでない）」の正しい置換がポイント。本来であれば「物惜しみ・けち」の意の記述が必要であり、文脈から推して書くにしてもせめて「しみつたれた貧乏人根性（によるものではなく）」くらいは書きたい。「節約」などの美德ではないのである。

問四（四行）

古本の前の持ち主は、教科書にすきまなく書きこみをするほどの学習意欲はあるが、一方では簡単な漢字も読めず、教科書に下らない書き入れをすべきでないことも分かっていない、愚かな生徒であったという意味。

*「熱心」＝「書き入れがびつしりとしてある」の置換。注意すべきは、「びつしり」とい

う擬態語をそのまま用いないことと、「書き入れ＝読み仮名」と決めつけないこと。また、「熱心・劣等生」の置換（意欲がある・愚かな生徒）自体も忘れないこと。

問五（八行）

教師は、最初は「私」が教科書に書き入れをしていると誤解し、言葉鋭く叱責したが、自分が書いたのではないと言われ、今度は「私」が貧しいのだと誤解して、誤って叱責したことに困惑し、後悔している。虚栄心によつて親孝行の勇氣と喜びを貫き通せない「私」は、同じ自分の弱さと卑怯さから、親孝行のために古本を買ったと真実を述べて教師の誤解を解くこともできないことが、誤解によって咎められたこと以上につらかったということ。

↓

（解答欄五行に変更）

教師は、まず「私」が教科書に書き入れをしたと誤解し、次に貧しくて古本を買ったと誤解して、誤って叱責したことに困惑し、後悔している。「私」は、親孝行の勇氣と喜びを貫き通せず、教師の誤解を解くために真実を語れもしない自分の弱さと卑怯さが、咎められたこと以上につらかったということ。

* 「叱責よりも強く私を悲しませた」を説明せよとある。「悲しい」という心情は、「屈辱・後悔・いまいましさ」などとは異なる。教師から貧乏だと思われたことが叱られるよりつらい、などという意味ではない。この最終問題で最も重要なことは、本文中の「この弱さ、この種の怯懦は、思へば、私のいままでの生涯に常に色々な場合と色々な現はれに於て、つきまどつてゐた」という、「私」の自己認識に基づく「悲しみ」をきちんと理解して、解答化できたかどうかである。教師は、（誤解1）「私」が書き入れをしている」→（誤解2）「貧乏なゆえに古本を買った（ので、本人の書き入れではない）」という、2段階の誤解をしている。だから、「誤解1→叱責」、「誤解2→叱責を悔いてゐる」という反応をしたのである。「私」は、誤解1を解いたにもかかわらず（これ、僕ぢやないんです）、誤解2を解こうとはしない。なぜか。そうするとウソがばれるので、虚栄心が邪魔をして本当のことを言えないからである。つまり、これが「私」の生涯につきまとう弱さであり怯懦であるということになる。